

大野川中流域における旧石器時代研究の 基礎調査 (3) 一片島道下遺跡一

橋 昌 信

1 はじめに

阿蘇の外輪山および祖母・傾山系の北麓に源を發する大野川は、緒方川・奥嶽川などの支流を從がえ、別府灣に注いでいる県下最大の河川である。この大野川の流域には河岸段丘や開析の進んだ台地が形成されており、しかもその段丘や台地には良好なテフラ(火山降下堆積物)が認められる。清川村・大野町・三重町を中心とする大野川の中流域は大分県下で旧石器時代の遺跡が最も集中する地域であり、東九州における旧石器時代研究の中心的存在とみなされる。

この大野川中流域の中で、特に大野町の「大野原」と一般に呼称されている標高200~300 mの台地を主体に、昭和50年から継続的な基礎調査を重ねている。すなわちこれまでに表面採集された遺物の実測・写真による記録ならびに遺物包含層の確認、それに遺跡の分布調査などである。それらの基礎調査の一部については既に発表されており、今回の報告もその継続として行なわれているものである。

2 遺跡の立地と土層の堆積

片島道下遺跡は大分県大野郡大野町大字片島字道下に所在し、大野原台地のほぼ中央近くに位置しており、標高は250 m前後である。道下遺跡のある片島は大野原台地の中でも旧石器時代の遺跡が特に集中する地域であり、当遺跡と隣接して数ヶ所の地点において石器類が採集されている。

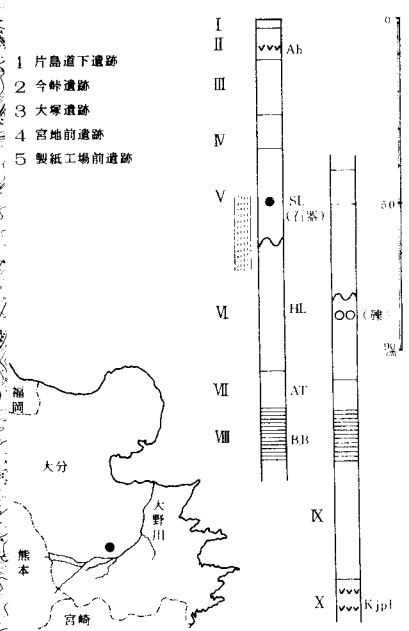
ここで報告する石器類の大半は表面採集で、しかもその大部分は圃場整備事業などによる削平の結果発見されたものであり、比較的広範囲の地域にわたっている。

道下遺跡の中心とみなされる個所は標高250 mのコンタによって描かれる三叉状の細長い台地の一端で、北および東は狭少な谷が入り込んでおり、南側は圃場整備によって切り取られ2.5 mの急な斜面を呈している。この断面には明瞭な土層の堆積が認められ、また断面において数点の石器類と礫が観察された。

I層…黒褐色のサラサラした土で、耕作土にあたる。厚層は5~10 cm。II層…黄色~燈色を呈するいわゆるアカホヤ(Ah)で、15~20 cmの厚さでほぼ純粋な状態で堆積している。III層…黒色~漆黒色をした比較的固くしまった土層であり、30 cm前後の厚さである。IV層…上部はやや黒味を帯び下部につれて褐色味を増す15~20 cmの土層で、漸移層として把握される。V層…茶褐色~黄褐色をしたローム質の土層でソフトローム(SL)とされる。厚さは40~50 cmである。VI層…褐色の固くしまったローム質土層で上の層とは明瞭に区別されハードローム(HL)と呼んでおく。その上面は凹凸が著しく、70 cm前後の厚い堆積が認められる。VII層…明褐色をした土層で乾燥するとさらに明るさを増す。土壌化が進んでいるが始良Tn火山灰層(AT)に対比されよう。20 cm前後の厚さで観察される。VIII層…暗褐色~黒褐色



第1図 片島道下遺跡の位置および周辺の旧石器時代遺跡



第2図 片島道下遺跡の土層模式柱状図

をした土層で、上面および下面の境は明瞭さを欠くが、ほぼ30~35cmの厚さを測ることができ黒色帯(BB)の層である。Ⅸ層…茶褐色をしたローム質の土層であるが全体に粒子が粗く、特に上部では軽石が認められる。70~80cmと厚い。Ⅹ層…黄白色~黄灰色を呈する降下軽石層で、一般に「マメンコ」と呼ばれる土層(kjp1)に相当する。

以上が道下遺跡における土層の堆積状況でありこれまでに調査を実施した近接する今峠遺跡や製紙工場前遺跡と全く同一である。当遺跡においては、Ⅴ層としたソフトロームの中部において遺物が発見され、また隣接する断面ではⅥ層のハードローム上部において円礫が観察された。

3 資 料

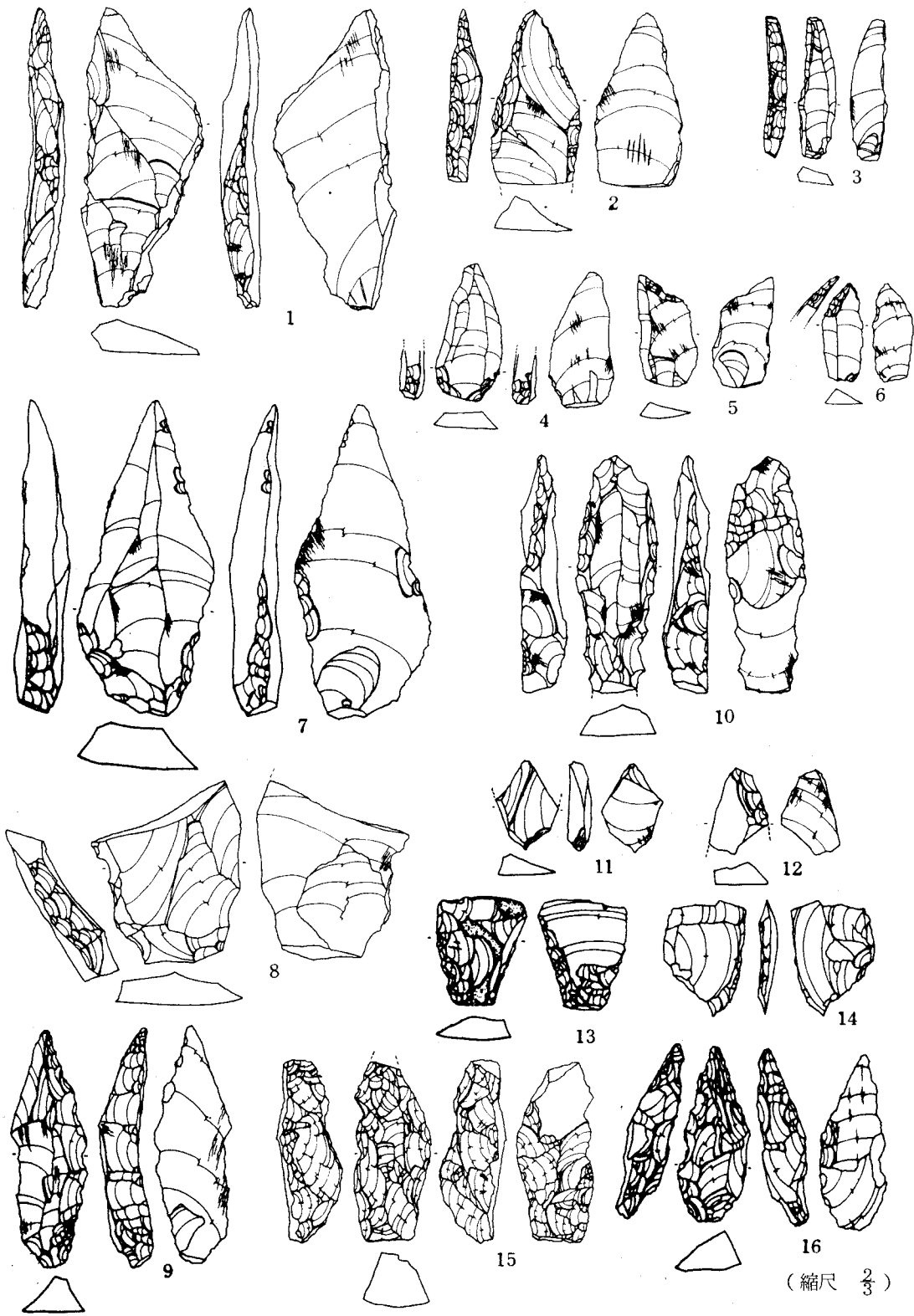
図示した資料の大半は表面採集によるものであるため、出土層位もまた組成についても全く不明と言わざるを得ない。ただ断面における観察からすれば、ソフトローム層の中部からハードローム

層の上部に本来の包含層が予想されるのである。

ナイフ形石器 (第3図 1~12)

片島道下遺跡での主体的な器種になるものと思われ、欠損品およびやや明確さを欠く資料も含めて13点あり、10・12のソフトローム層(Ⅴ層)出土の2点を除いて、全て表採資料である。大きさ・形・それにナイフ形石器認定のメルクマールとされるブランティング(刃潰し加工)の部位・状態などにバリエーションがみられる。石材は流紋岩の他、表面の風化が進んだ頁岩質あるいはホルンフェルス質のものそれにサヌカイト質のものが含まれている。

(1)は比較的大きな剥片を素材に一侧辺の大部分と反対の辺の約 $\frac{2}{3}$ にブランティングを施し、斜向する刃部を有している。ブランティングによって素材となった剥片が大きくカットされている点にこのナイフ形石器の特色が見い出せる。(2)は基部側の一部を欠損しているが(1)と同様に縦に長い剥片の一侧辺と反対の辺の短い刃部を残す全て



(縮尺 $\frac{2}{3}$)

第3図 道下片島遺跡 (ナイフ形石器・台形様石器・槍先形尖頭器)

にブランディングが施されていたものと推定されやはり素材が斜め方向にカットされている。刃部には使用によると考えられる刃こぼれが観察される。石材は頁岩あるいはホルフェルスと思われるが定かではない。(3)は小形の細身をした典型的なナイフ形石器である。一側辺と反対側の基部の一部にブランディングが施されており、背部のそれはほぼ直角をした丹念な整形である。基部には素材となった縦長剥片の小さな打面を残している。(4)は両側辺の基部にのみブランディングが施されたもので、素材となった長い剥片の形が活かされている。やや大きめの平坦打面が基部にみられる。(5)(6)はいずれも先端部の一部にのみブランディング加工が行なわれた極めて簡単な作りの小形のナイフ形石器である。ブランディングの部位は僅かであるが、素材となった縦長剥片を斜めに整形することによって鋭利な先端部を見事に形成している。(7)は比較的大形で厚味のあるしかも打面と反対の一端が鋭く尖っている縦長剥片を素材に選んでいるナイフ形石器である。ブランディングは打面の一部を除去した基部にのみ集中的に施されている。(8)基部の一側辺にブランディングが施されている。基部のみしか存在しないため全体の形状は正確に知り得ないが、(7)と同様な大形のナイフ形石器である。(2)と同じような白っぽい色調の石であるが全体に粒子が粗く安山岩質の石材のようにも思える。(9)は厚味のある縦に長い剥片を素材にして、その一側辺に大きな剥離のブランディングが施された尖頭状のナイフ形石器である。全体の形状からすると一種の尖頭器とも考え得るが、加工が一側辺に集中し、しかも縦断面が彎曲していることからナイフ形石器とした。この地域の石器の石材としては珍しくサヌカイト質である。(10)

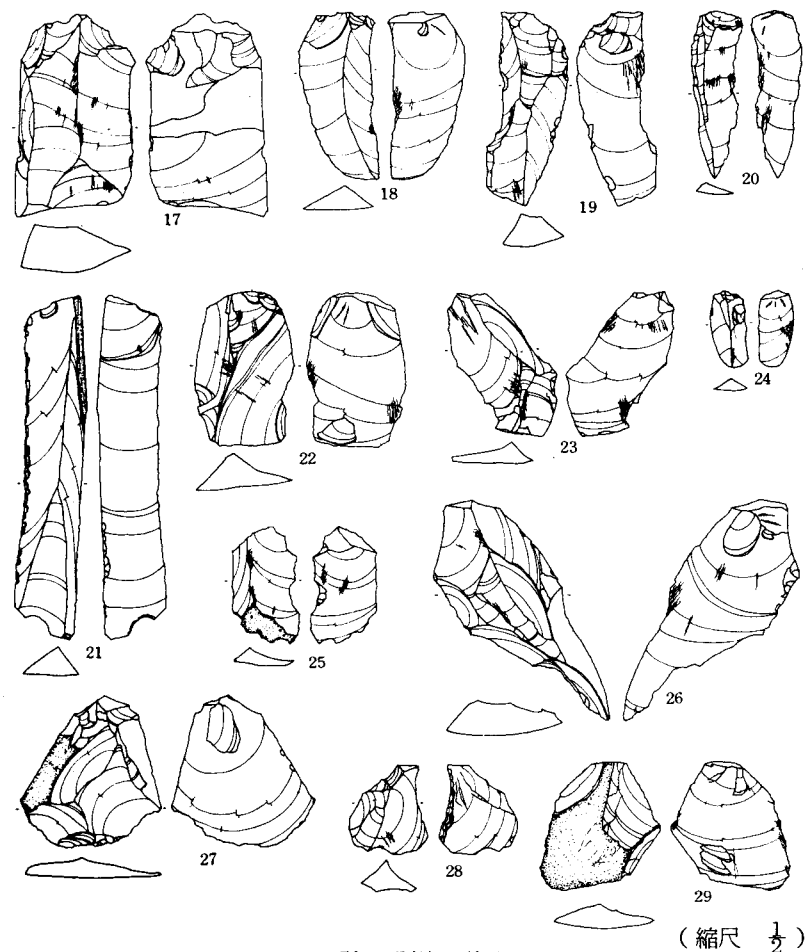
は(9)と同様に厚味のある縦長の剥片を素材にして両側辺の大部分と主要剥離面の一部に二次加工を施した石器で、厚味のある基部と考えた部位の一端を欠損している。ここではナイフ形石器として認定したが、他のナイフ形石器に比較してやや特異な存在である。土層断面のソフトローム層中部で発見された資料である。(11)は明確な判断を下し得ないが小形のナイフ形石器の基部と考えられるもので、一部にブランディングが観察される。(12)も大部分を欠損している資料であるが一部にやや粗いブランディング加工がみられることからナイフ形石器と考えた。石材は(8)と同様と思える。

台形様石器 (第3図 13・14)

台形様石器と考えられる石器が2点発見されているが両者は著しく異なっている。すなわち(13)は素材となった剥片を縦位置に用い、打面側をこの石器の基部として、一側辺の両面と基部側の主要剥離面に丹念な二次加工を施して形を整えている。直線的な刃部に使用によると思える小さな刃こぼれが観察される。サヌカイト質の石材が用いられている。一方(14)は縦に長い剥片を横位置に使用して、打面と反対の一端に二次加工を施すことによって剥片の一端をカットし、この石器の一側辺を形成している。反対側の一側辺には剥片の打面が残されている。台形様石器としてはその加工は雑で全体の形状もあまり整っていない。

槍先形尖頭器 (第3図 15・16)

尖頭器も2点採集しているがやはり異なった点が指摘できる。(15)は横断面がほぼ台形～三角形を呈するもので、二次加工は主要剥離面側から施された両側面および主要剥離面の大部分に見られる。すなわちすべての面に加工が行なわれているのである。先端部の一部欠損しているが全体的にズン



第4図 片島道下遺跡(剥片・他)

(縮尺 $\frac{1}{2}$)

グリした形状を有する尖頭器であり、石材はこの一点のみや質の悪いチャート質のものが用いられている。(16)横断面が三角形を呈する小形の尖頭器で、二側面の加工は主要剥離面の方向から施されている。主要剥離面には横方向からの大きな剥離が一面認められる。サヌカイト質製。

剥片・他 (第4図 17~29)

当遺跡において採集されている剥片の資料はそれほど多くなく、図示したもので概要を知ることができるであろう。剥片の形状からは(19)(20)(21)で代表されるブレイド状の形の整った縦長剥片と(23)(26)のような「ノ」の字状のもの、それに(27)の

如きやや横に長いものの三類に大別できる。共通している基本的な特徴として比較的大きな平担打面を有することであり、その打角は 110° 前後を測ることができる。(21)はブレイド状の見事な剥片で一側辺には使用によると思われる痕跡が著しい。(28)は不定形の剥片の一辺に小さな二次加工が認められる資料である。

4 まとめ

当遺跡の主体を占めると考えられるナイフ形石器のうち、

両側辺のプランティングによって素材を大きくカットして整形するいわゆる「茂呂型」のナイフ形石器(Ⅰ類)は近接する大塚遺跡や宮地前遺跡などの表採資料中に類似したものが認められる。また一側辺に加工が集中するもの(Ⅱ類)は宮地前遺跡に好例が存在している。ナイフ形石器の基部の両側辺に二次加工が施されるもの(Ⅲ類)はやはり隣接する今峠遺跡・製紙工場前遺跡、それに三重町の百枝遺跡などで散見できる。さらに剥片の一側辺の先端部にのみ加工を施したナイフ形石器(Ⅳ類)は大野高校遺跡や今峠遺跡の採集資料中に見出すことができる。このように片島道下

遺跡採集のナイフ形石器は同じ大野原台地およびその周辺の遺跡において認められるのであるが、これらの諸遺跡のどこのナイフ形石器に最も類似するかとなるとやはりその判断に苦慮するのである。すなわち先に挙げた遺跡もその例外でなく、一遺跡、一文化層という限られた時期の遺跡において数型式あるいはそれ以上の数の型式が存在することが一般的な傾向であるからである。そこでナイフ形石器の形態の差異は時間的な変遷の中で把握されると同時に、機能の違いとしての積極的な把握方が考慮されるべきと考えられる。それ故ナイフ形石器の形態的な特徴のみをもつての対比は一段と検討を要するであろう。

一方、台形様石器については、大野川中流域の旧石器時代遺跡においては稀な存在であり、他遺跡との比較の上で重要な示唆を与えるものと思われる。当遺跡から北西に約500m離れた今峠遺跡に好例が求められるのである。また先に述べたナイフ形石器でも道下遺跡出土の4類に分類した中で3類が今峠遺跡で認められるなど類似した様相が示されている。が、しかし今峠遺跡での特長的な小形の幾可形をしたナイフ形石器は道下遺跡では見られず、逆に断面が三角形～台形をして、二面ないし三面に加工が施された尖頭器は今峠遺跡において認められないのである。むしろ、これらの尖頭器は岩戸遺跡(岩戸第1文化層)や百枝遺跡などとの対比が可能と考えられる。

以上の事から極めて消極的であるが、片島道下遺跡の採集資料の主体をなす時期は、今峠遺跡に近接しながらも先行するものと判断され、岩戸1や製紙工場前遺跡との関連も見逃し得ないであろう。

片島道下遺跡の基礎調査では、地元の安藤栄治君、別府大学史学科の綿貫俊一・栗焼憲児・森脇幸生君それに道上康仁君の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

〔参考文献〕

- 1967 芹沢長介。大分県岩戸遺跡旧石器時代遺跡。考古学ジャーナル 14
- 1973 渡辺誠編。大分県大野郡宮地前遺跡発掘調査概報。平安博物館
- 1973 鳥養孝好・清水宗昭・橋爪啓史。大野川流域における先土器時代資料。速見考古 4
- 1975 清水宗昭。九州東北部における後期旧石器時代の様相。大分県地方史 77
- 1976 鳥養孝好・清水宗昭・橋爪啓史。大野川流域における先土器時代資料Ⅱ。速見考古 5
- 1978 町田洋。大野川流域の古代人類遺物を包含する火山灰層。クロボク
- 1978 芹沢長介編。岩戸。東北大学文学部考古学研究室 考古学資料集 2
- 1978 橋昌信。大野川中流域における旧石器時代研究の基礎調査1 -今峠遺跡-。別府大学博物館研究報告 3
- 1979 橋昌信。大野川中流域における旧石器時代研究の基礎調査2 -製紙工場前遺跡-。別府大学博物館研究報告 3